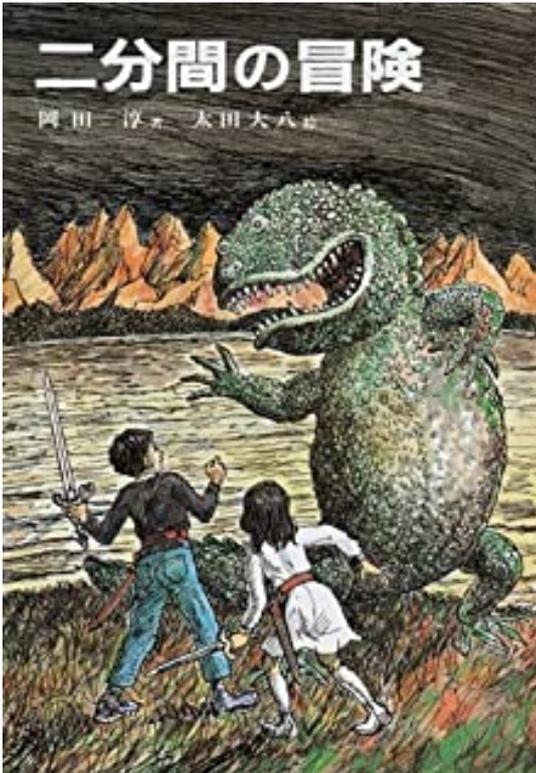


# 『二分間の冒険』

～五年生 国語<本の世界を広げよう>261ページ～



これほど面白い児童文学はあるのでしょうか。子ども時代に一番読んでほしい本の一冊です。

校庭で不思議な黒ねこに出会った悟が、全く知らない世界へ連れて行かれ、<いちばんたしかなもの>をさがす二分間の冒険の話です。

精密な設計図の元に組み立てられているような物語を、主人公の悟と共に、なぞを考え続けながら読み進みます。まるで物語の中に自分も入り込んだのかと錯覚するほど、全く頭が休まりません。頭の中に汗をかいているような感覚は、この本の醍醐味です。

竜や子ども達が出すなぞかけは、ほぼ哲学です。そのなぞかけには、大人もうなる答えがきちんと用意されています。

私がいちばんかつこいい！と思ったなぞかけは、悟が竜に出される問題【やみのなかでもそれとわかるが、光のなかでもそれは見えない。どこからくるかはわかって、どこへいくかはわからぬもの。それはなんだ。】この答えがしびれます。伏線が花開く瞬間です。

この物語のテーマは「時間」です。そして描かれているものは「青春」です。小学校の教員として働いていた作者の、子ども時代への誠実な視線が溢れ出しています。

- 読むのにかかる時間 二日間
- 単行本 260ページ
- 偕成社